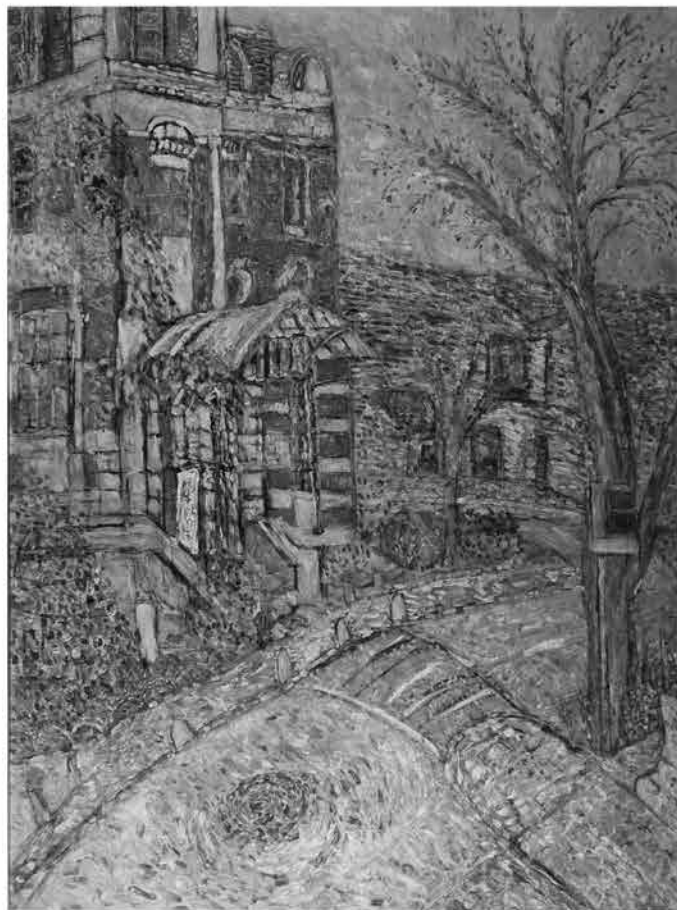


市田 清 私の100枚の絵



猫と
伝説

1992~2016

―自然の美しさ、見知らぬ世界との出会いに感動して描いた 私の絵の世界―

私にとっての絵とはなんだろうか

自分の感じたものを表現したもの。その感動が私の絵のなかにある。

描くことは、対象に触発され、自分にあるものを見つけ出し表現すること。

感動を伝えたいという思いが、描くことの原動力なのです。

自然と風土は、四季折々に、いつも見慣れた風景を、ある時、はっとする美しい

姿に変える。祭りの躍動感、日々の暮らしの中にも新鮮な驚きがあります。

春になれば花を咲かせ、やがては枯れるが、次の春には再び花を咲かせる。

そして、自然は死と再生の循環を繰り返している。

動植物は土から生まれて土にかえる。

描くことは その場に居合わせた空気とひとつになることです。

見知らぬ世界との出会いは、新鮮な驚きとの発見です。

自分には自分に与えられた道がある。天与の尊い道がある。

広いときもある。せまいときもある。のぼりもあれば、くだりもある。

思案にあまるときもある。しかし、心を定め、希望をもつて歩むならば、

必ず道はひらけてくる。描くことの深い喜びもそこから生まれてくる。

こう信じてひたすら描いた作品から100枚を選びました。

100枚の絵は、私の子供たちです。

市田 清さんの絵について

西井 義晃

秋の日差し of 眩しいアトリエで、市田清さんの絵を見ている。

この絵の明るさと美しさはどこから来ているのか。

決してうまいという表現では表せない純粹さに魅せられる。

仕事の合間に公募展に出品されていたと聞くが、悪い影響を受けず、良い先生に恵まれたのだろう。若い頃、ゴッホの絵に感銘を受けたと聞いたが、良い絵を見て自分の感性で受け止めている。

風景画や人物画、風俗画は特に好きだ。まじめで嫌味や、けれんみもなく濁りもない。こんな絵を室内に飾ると明るくて気持ちが良い。絵を見て心優しい良い人柄がうかがえる。

祭りの絵や四季の風景、楽しい人物画、市田さんが、ひそかな孤独の長い時間を神の救いがあったにちがいない。

彼の絵に出合ったのは、秋の今宮高校のOB会展である。

いつもより戎橋画廊が明るい。

彼の十号の二枚の作品のせいだと思った。

私は、結婚式の祝辞は、いつもしくじるし、こういう推薦文というのは苦手だ。

高校の美術の恩師と飲み友達の弔辞は絵よりうまいと褒められた記憶はある。

市田さんは、私より十歳年下で、後輩であるらしい。

私は、絵を業として八十歳近くまで生きてきた貧乏画家である。

いつも売れる絵を描こうとすると、絵に品がなくなり賤しくなる。

見る人が楽しんでくれる愛情のある絵を描こうと心掛けている。

絵を描くことは、ふたたび愛することだ。画家と同じ目でみることは、愛のこもった目で見ることが可能である。

画家は、見たものを見てくれと感じさせる。いまわしいものは何もない。

あるとすれば、私たちの眼力そのものだ。

市田さんは、技術者として人生を歩まれ、傍ら画家として対象にこだわらず素直な目で世界を見つめ、ありきたりのものが尽きることはない愛情の源になっている。私の敬愛する画家である。

西井義晃 個展 2017年9月13日～19日

大阪なんば高島屋 第17回展

宇津木 欣二

年々 魂の絵に変貌してゆく様は 側で見えていて心地よい思いです。

長行司 達

市田さんの絵画展には枚方時代からご縁がありました。四年前からは、私の作品も出展願っています。ご縁の妙を感じながら長年に亘り画道を楽しみ我風を築いてこられた市田画伯に敬意を表しお祝い申し上げます。

門脇 宣孝

毎年恒例の個展を楽しみにしています。画廊のエレベーターの扉が開くと目の前に現れる空間は圧倒的な明るさにあふれています。たくさんの掛けられた絵が発するエネルギーに満たされていてそれに浸ると和やかな気分になり、私自身が充実するようで、そのしばらくの時間がとても貴重です。

櫛木 好明

初冬の光が差し込んで市田さんの「大阪城公園の梅」の絵が居間に懐かしく温かい空気を醸してくれます。初めて市田画伯の絵を見たときから、素朴でやや粗いけれど柔らかい筆遣いと優しい色合いに魅了されました。これからも市田清画道が、どう追究されるのか楽しみにしています。

並河 博

十六年間に二十二回の個展、集大成である画集を発刊されおめでとうございます。とても淡い色を使い、その場の雰囲気大切にされる市田画伯の絵が私は好きです。これからもお元気で絵画道を突き進んで下さい。

本田 元子

毎年個展を開催し、大作を含む数多くの力作を出展、しかも長年にわたり継続してこられたことに、いつの間にかこんな描けたんやろ？と驚嘆するばかりでした。あらためて敬意を表します。会場では、とびきり明るい色彩と力強いタッチの作品群からパワーを貰って、いつも心を満たされて帰途についたものです。今後もますますのご精進を祈ります。

目次

一期一会	6
私の100枚の絵	19
日本の美を求めて	48
春	48
錦秋	51
花	54
祭	55
海	58
道	60
見知らぬ世界を求めて	63
スケッチ帖から	71
作品一覧	73
あとがき―あらたな出発―	74
謝辞	76
道（詩と絵）	77
略歴	78

一期一会

夢中になって描きたいモチーフに出会うことは、いわば神からの授かりものです。

「これを描きたい」、「ここを描きたい」と思うのは、対象を自分自身が、もともと求めていたからです。

自然界に、最も美しい色彩の調和と造形があります。

自然の森や山の中に生えている雑草のなかにも、色彩の調和を発見できます。

自然は、表面よりも深みにおいて深い調和があります。形も同じです。

木々の枝、草花や茎、蔓の形など、自然が生み出す造形は、人間の頭の中でひねりだした形ではありません。

この自然界が生み出した造形が気候や温度、湿度によって、千変万化します。

そして、四季折々に、いつも見慣れた風景を、はっとする美しい瞬間に変える。

祭りの人々の躍動感、フォルムは、私に元気を与えてくれます。

又日々の暮らしのなにげない表情のなかにも、私の感動の源がある。

見知らぬ異国の人々との出会いは、新鮮な感動の源泉です。

このモチーフと出会った時、この色調の調和、フォルム、息遣いを描きたい、伝えたいという衝動にかられます。

これこそ「一期一会」である。この眼差しを大切にしてきました。

：

日本の美を求めて

日本は、明快な四季を持つ国です。日本ほど春夏秋冬がはっきりと分かれた気候と風土をもつ国はすくなくない。

春分、夏至、秋分あるいは立春、立夏、立秋、立冬というように、春には、匂い立つ花々、夏には目にまぶしい緑、秋には燃え上がるような紅葉、冬は純白の雪、鮮やかにその姿が変化する日本の自然美は、不可思議な自然からの贈り物です。

植物は、「生」を受けて、次への種を残し、土にかえっていきます。

そして春には再生します。

湿潤な気候から生み出された日本の自然は単に美しいだけでなく、神秘的です。

この自然は、我々に、豊穡な恵みと同時に、時には災害をもたらします。

こうした自然に畏敬の心を持ち、不可思議さに、信仰の対象として見てきた。

日本人の美意識は、「滅びの美学」です。

人間も同じく、「生」を受けた瞬間から、「死」という滅びに向かって生きています。だからこそ、自然の再生に憧れ、感動するのです。

錦秋の屏風岩（絵2）

三重県、名張の近く、そこに高原の麓から車で40分上った自然公園のところに屏風岩があります。

秋、カルストの屏風の岩肌にまとわりつく紅葉は、雅、あるいは侘びて、絢爛と綴られた紅葉の衣を引き立てます。

カエデや銀杏、桜、ハゼは紅色や黄色をさらに磨き上げる。

まさに“錦秋”です。この色彩の競演は、女性の着物のような華やかさです。

空の景色も刻々と変わっていきます。まさにこの一瞬の出会いです。

足元には、ススキがもう冬支度を始めています。

十一月初めから毎週週末に、100号のキャンバスを積んで現地で仕上げました。

花の寺（絵3、4、5、6、36、37、44、45、46、47）

願わくは花のもとにて春死なむ 西行

桜がはらはら舞い、散っていくその下で死にたい、そう言い残し、旅の途中でこの世を去った西行。

勝持寺は、京都 西山にある桜の名所で、春には、境内には西行法師手植えの「西行桜」を始め、桜花で埋め尽され、まさに花の寺です。

仁王門への石段は、桜の絢爛豪華の極みです。

春の桜の時もいいですが、秋の桜の紅葉と色とりどりの落葉も見事です。

石段への道を、春、秋の2枚を同じ場所で描きました。

石段を見上げた紅葉。石段から下を見た景色それぞれに、印象が変わってきます。

訪れる人も少なく車でしか行けないので、毎年、100号のキャンバスを立てて終日描きました。

吉峰寺（絵7、42）

京都 西山。西国二十番札所、洛西一番札所である。樹齢600年の“遊龍”の松で有名です。

山腹を利用して建てられた堂舎は、複雑な美しさです。

桜やカエデの紅葉は広大な寺域を燃え上がらせ、まさしく豪華絢爛な衣が織り上げられ、妖艶な感じがします。

八幡の背割り桜（絵24、34、ス5）

木津川と宇治川を分ける背割堤は、春になると咲き誇る桜でほのかなピンク色に包まれる。自然の大パノラマが広がる川沿いに、約250本のソメイヨシノが1.4キロメートルの桜並木をつくっている。満開の桜のトンネルは圧巻です。

桜吹雪の現場で、パステルでスケッチを、何枚もとり、100号の「惜春」に仕上げました。

長谷寺回廊（絵8、52）

牡丹は豊麗な花姿といい、艶やかな色彩といい、「百花の王」と呼ばれるにふさわしい。

その昔、唐の玄宗皇帝は、楊貴妃をボタンに見立て、その美しさを絶賛したという。

仁王門をくぐると、登廊が延々と続き、いくつもの釣り灯籠と列柱からなる登廊から

大輪のボタンの花をみていると、平安時代、紫式部や清少納言も同じ風景を楽しんだと思うと、なんとも優雅な気持ちになります。

里の秋（絵11、12、13、100）

枚方、交野のくろんど池のあたりに、ゴッホの絵と同じ稲穂の風景に出会う。

大柳生のコスモス畑の近くの稲穂の里は、日本の豊かな里山の原風景です。

近くでは、秋祭りの声が聞こえます。

二月堂への道（絵14、69、70、71）

奈良、東大寺の二月堂は、シルクロードの終着点。白壁には、春を待ちこがれる隠された燃える生命、土塀の匂いは、古代のロマンがします。シルクロードを経て、文化や宗教がはるばると日本に伝わってきました。

早春のころになると、二月堂の道で、写生してきました。土塀の感じが、古代の息遣いを表せるように何度も通いました。

梅（絵29、30、31、32、33）

二月になると、梅の便りが待ち遠しいです。大阪城の梅林は、早咲きから遅咲きまであり、長い間楽しめます。天気の良い日は、毎日、パステルでスケッチしています。

月ヶ瀬の梅溪は、奈良県、月ヶ瀬尾山とその周辺に位置する梅林で、五月川の溪谷沿いに1万3千本の梅の木が広がり、手づくりのお餅も名物で、食べながら写生していると、春がきたことを実感します。

この辺りは、私のお気に入りのお気に入りの写生スポットです。パリのシテ島付近にこのような景観です。晩秋の大阪中央公会堂付近は、銀杏が足元で舞っていて、中央公会堂、東洋陶磁美術館を背景にした風景はパリにいます。

60号のキャンバスを電車で運んで、何回にも分けて現地で制作しました。近くには、薔薇公園があり、両側には川が流れ、レンガや石で造られた美しい園内は、都会の真ん中であるということを忘れさせてくれます。

5月になると、毎日、パステルで、薔薇の香りをかきながらスケッチにいきます。

伊根の舟屋（絵22、23）

浦島太郎伝説のある伊根の舟屋は、波静かな伊根湾にあり、船のガレージです。住人は、2階で生活している珍しい景観です。海の恵みと共に生活に息づく日本の原風景が残っています。

昔、漁師の妻は、家で機織りをしながら生計を助けていたといいます。今でも、「ガッチャン、ガッチャン」の音が聞こえてくるような気がします。

大阪南港の太公望（絵21、65）

大阪南港で親子が釣りをしています。幼いころの自分を重ね合わせました。今日は、大物が釣れたかな。遠くには、海遊館が見えます。

六甲アイランド（絵9）

新緑の頃、六甲山のハイキング小道を分け入り海側を眺めると、天気によければ六甲アイランドの人口島が望めます。学生時代に、神戸市が西神戸の山を削って長い労苦の上でできた人口島です。海に浮かぶ芸術品のように見えます。

その様は壮大なパノラマです。晴れた一瞬は、一期一会です。

尾道海景（絵67、68）

尾道は、坂の多い町です。千光寺行きのロープウエーを使わず麓から息をきらしながら登り振り向くと絶景の尾水道が広がっていました。坂の中腹の千光寺近くから、行きかう船、造船所が見えます。近くには、電車の道が通っています。千光寺さんが、港町の平安を祈っています。

尾道は絵になる町です。魚もおいしいです。何度も、写生に行きました。

妙高高原にて（絵25）

新潟県、新井に出張したとき、妙高高原から一面の雪景色であった。

雪が、吹きすさび、寒い中、凍える手で、パステルでスケッチしました。

もう春も近い。雪解けの気配がします。

祭りは町の文化そして宝物

七月、関西の夏は、コンチキチンのお囃子から始まります。京都の祇園祭、そして一年で最も蒸し暑い時の天神さん、大文字の送り火で、暑さも峠を越し、最後は威勢のよい岸和田のだんじり祭りです。締めくくります。祭りは、町衆の文化であり歴史、遺産、代々受け継がれてきた宝ものです。

祇園祭り（絵15、16、17、54）

宵山は旧家や老舗にて伝来の屏風などの宝物が披露され、屏風祭ともいわれます。

山鉦巡行ではさまざまな美術工芸品で装飾された山鉦が巡るため、「動く美術館」です。

宵山の南観音山の「ろうそく奉納」では、子供たちが、「明日はでません今日限り」の合唱で、一年の感謝と今年一年の無病息災を祈っています。子供たちにとっては、こんな経験できるのは、人生にとって貴重な思い出になるでしょう。

祇園祭のハイライトの辻回しは、絢爛たる日本文化の芸術品を、方向転換するのですが、音楽と、引き手の息の合う呼吸がなんとも力強くそして優雅です。

遠くシルクロードから伝わったタペストリーもみることができます。引手に外人も参加しての文化交流です。

天神祭り（絵18、19、55、56、57、58）

天神祭は、菅原道真公を祀っています。古代朝鮮半島から伝わったような儀式から始まります。お迎え太鼓は、向かい合った太鼓が交互に反復しながら、叩く勇壮な儀式です。このあと、「わっしょい、わっしょい」の掛け声で、神輿をかつぎ、船に乗せていきます。

御輿の上の両側には、音頭とりと担ぎ手の表情は、躍動感にあふれています。

この、御輿を、船に乗せ川渡行の開始です。これから、華やかな花火の打上げです。

速度に乗っただんじりを方向転換させる「やりまわし」が醍醐味です。この豪快な「やりまわし」は、曳き綱の付け根を持つ綱元がラインと速度を決め、屋根上の大工方が指示を出し、台木後方に挿し込まれた後艇子を外側へ振って行く。

様々な曲率に合わせた 微調整を、だんじり側に乗車するセミと呼ばれる役が、外側は降車し、内側は増員するなどして遠心力に対応し、ブレーキ担当者が必要に応じてブレーキを踏んで行く。

ソーレーソーレーの掛け声で、老若男女全員が、だんじりを引つ張ります。

祭りは、夏の風物詩。長い間守ってきた町の宝物。私たちが、もつとも大切にしなければならぬ文化。鉾、だんじり、神輿を引く老若男女のフォルム、表情、眼の一瞬こそ かけがえのない「一期一会」です。

見知らぬ世界を求めて

描くことは祈りから始まった

莫高窟の壁画を見たあとの帰りの敦煌から西安へのプロペラ飛行機の機上から見下ろすと、砂漠ばかりである。昔、玄僧三蔵は、ラクダで、オアシスを探しながら、長安からインドに仏典を求めた。パワーはどこから出てきたのだろうか。

「莫高窟で、あんな素晴らしい壁画をどんな人が、どんな想いで描いたのだろうか。そのエネルギーは、どこからきたのだろうか。」と、考えてみた。

莫高窟の壁画は、西域の多くの民族が、自分たちの心の救済と安らぎをもとめて描いたのではないか。



この砂漠のど真ん中で、絵師たちが足場を作って日夜描いたのは驚異に値する。いわば当時のアートセンターのようなものだったと思う。

フランスのラスコー壁画の洞窟（保存のためコピーしか見れない）を見たとき、狩猟の獲物の姿を描くことで、仲間や獲物と手法を共有していたのだと教えられていたが、現地に行ってみるとこんな暗く狭いところでよくも描けたものだと思ってしまう。かなりあとになって千住博氏の、最近の研究結果の話を読んで納得ができた。

描かれている動物の骨の調査から、当時の動物をほとんど食べていなかったことがわかったという。

角のあるバイソンや鹿が描かれ、月の満ち引きをあらわしており、シャーマンの手伝いをしてしていると推測しているのである。月の満ち欠けや、夜、忽然と消え天空にのぼり、そして消えていくプロセスは、死と再生が重なってきます。壁画に重ねて描くという行為は、瞬間芸術であり、その問いかけを通じて神なるものとの美的感動を同一のものと感じているというのではないか。

以前見たエジプトのルクソールの王家の墓で、棺に天体を描いていて、ファラオが天球を持ち上げていた。このとき、天球を支配したい願望と ナイル川からのファラオ自身の再生を信じているように感じたのが思い出された。

クメール人のアンコールワットのレリーフも、この地方の神話を、重ね書きしていた。動きを表すという描き方は、瞬間芸術であり神との交流であったのかもしれない。集中豪雨、乾季のはげしいこの地帯の水の恐ろしさと恵みを、神として、畏怖し祈ったのだろうか。

我々の祖先は、古代から、人の力を圧倒的に超えるものに対しての怖れと、そこから生み出される恩恵に、ひれ伏し、鎮魂と祈りをささげてきた。

我々の祖先にとって、描くことは、その姿をあらわし、仲間に伝えたいという思いからはじまった。

ベナレスのホテルで、未明、目を覚ました。ベランダから見ると庭で結婚披露パーティーの終盤であった。千載一遇のチャンスである。夜通しのパーティーのあとのクライマックスは、新郎が、新婦の腕輪を外すシーンである。金ぴか、赤、黄色の原色で彩られた華やかさはまばゆい限りです。上流階級は、金が財産である。自分の身を守ってくれるものだからです。

このホテルを一步出ると、牛が悠然とアスファルトの道を歩き回っている。

一握りの裕福な人と、多くの貧しい人びと。雑踏。喧噪。牛の糞。近くの川では、聖なる川での沐浴。

ガンジス川には、多くの人々のろうそくと花のお供えが浮いている。時間がゆったりと流れている。

少し行くと、ジャイナ教の寺院があり、旅の友達と一緒に入ると、友人は、踊りだし瞑想状態になってしまおうではないか。あとで聞くと、「阿波踊りに紛れ込んで連れ込まれて一緒に踊ってしまったような気分になった。」というではないか。

神々は、変身する。森本哲郎によれば、この神々の化身は、生物の進化を示しているという。この世界では、生物は最初水中にいた。だから神は魚の姿をしている。陸にあがり両棲し、亀になったとう具合に。そしてシヴァ神は、破壊と創造の神。このガンジス川に、アジアの思想が流れこみ飲み込まれていった。いわば、ゼロである。ゼロに何を乗除しても結果はゼロである。このゼロは空に通じるものかもしれない。ここから、仏教は誕生したのである。

ここで生まれた教えは、はるばると砂漠を経て、中国文明に磨かれ、その精華が、朝鮮半島を経て、奈良二月堂の戒壇院にもたらされた。

この仏教をも、インドは、また飲み込んでしまった。釈迦が瞑想した菩提樹に行ったが、今はもう何も残っていない。近くでコーランの声が聞こえる。

海峡の向う側のスリランカには、仏歯寺があり、釈迦の歯が安置されていた。

砂漠にて 時間意識について思う

シリアのパルミラは、ローマから日本に通じた交易の中心地であった。この周りには、いまは砂漠が広がっているが、当時はオアシスであった。

砂漠には、時を意識させる風景がない。風が吹けば、砂紋には、砂が堆積し、いつか消滅してしまう。

そして厳しい寒暖差。一日の時間の推移は太陽によってのみ感得でき、その推移は毎日寸分たがわれない。

こんなところで生活していると、なにか、無重力にいたような感覚で不安になってしまう。不安を克服しようとすれば、時間というものを作り出す以外にない。これが、砂漠の民に時のはじめと終わりという独特な時間意識に発展させた理由なのだ。

エジプトのアブシンベル宮殿の奥深くに、一年に2回だけ、春分の日と秋分の日正午に光が差し込む。この光の差し込むまさにこの一瞬に、人々は神を感じた。これが、時間認識の始まりなのかもしれない。

中国にて (絵84、85)

西域古城は、玄奘が、はるばる仏典を求めて、インドに旅した中継のオアシスである。

今は、砂漠となっていて、親子がロボのバスを営んでいる。日本ではもう見られないほほえましい光景です。

九塞溝近くには、ラマ教寺院があり、少女は写真を撮られると、魂が盗まれると教えられているらしい。日本の幕末に戻った感じです。

西洋絵画と教会 (絵90、93、97)

オランダ、アントワープ大聖堂でルーベンスの絵に出会った。

フランダーズが愛犬を連れて、雪の中、遠路はるばる会いに来る絵です。

イタリアにいくと、あちこちで、天にまで伸びる教会に出会う。

そして、がつしりした土台、建造物にいつも圧倒される。

美しいステンドグラスとそこから差し込む光。そこに、

西洋絵画の至宝があり、静かに鑑賞できます。旅行中、疲れた時よくここで休憩したものです。

トイレはないが、無料なので重宝しました。

パチカンのシスチナ礼拝堂のラファエロのアテネの学堂の前に立つと、その臨場感と迫力は、その時代にいる錯覚になります。

現在の計算され尽された3次元CGを見ているようです。

フレンチェで育てられたダビンチやミケランジェロのルネサンス絵画が、遠近法はじめ西洋絵画の大半の基礎を作り上げた。神の意志を伝えたいという教会が、この西洋絵画の強力なインサーであった。

ヨーロッパでは、町には必ず教会があり、人々の生活に溶け込んでいます。



マラケシュとはベルベル人の言葉で「神の国」。モロッコの独自の文化を持ち続ける北アフリカの先住民族です。ベルベルとは、ギリシャ語で「わからない言葉を話す者」を意味する言葉に起源を持つ。

外敵の攻撃から街を守るために築かれた高い城壁があり、その内側には、砦が築かれ、赤い壁で囲まれた住居が作られた。そこには、迷路のような路地で、民族衣装をきたベルベル人、ロバが行き交っている。店では、革製品、銀製品、香辛料、ベルベル絨毯、肉、果物などのあらゆる店が商いをしています。

ここでも、耳を澄ませば、コーランの声が聞こえてくる。乞食にあった。乞食のほうが、身なりがきれいなのに驚いた。ガイドに聞くと「バクシーシ」とは、ベルベル語で「喜捨」のこと。与えたほうが幸せになるという。

この町には、盲人がモスクにたどり着くように、当時の盲人用の行き先目印が残っているという。街そのものが醸し出している雰囲気と、迷宮の路地は異次元か異世界です。異邦人にとって、アラブ世界の面白さを満喫できる町です。



ジプシーの踊り（絵27）

スペインアルハンブラ宮殿近くの洞窟に、ジプシーのフラメンコの踊りを見た。劇場でのフラメンコショーとは違って、生活感のある迫力です。

ジプシーは、当時、洞窟を移動して生活していたので、家財道具一式を持ち運んでいた。一時間ほどの間、フラメンコの踊りと一体になる異文化との遭遇です。



赤い屋根（絵92、93、94、95、96）

ドブロブニクは、ヨーロッパのアドリア海に面したクロアチアの港町で、アドリア海の真珠です。

ドブロブニク旧市街は、城壁に囲まれています。上に登って一周すると、いろいろな角度からの旧市街をみることでオレンジ色の屋根は、圧巻です。

チェコなどの中央ヨーロッパでは、赤い屋根の街並みが、移し景観です。



オルセー美術館にて（絵98）

パリのセーヌ川を挟んだルーブル美術館の向かい側にオルセー美術館がある。

私は、ルーブルよりオルセーのほうが好きである。絵が明るく、輝いていて楽しくなる。

2階の展示室は、近代絵画の宝庫であり絵画の変遷がよくわかる。

セザンヌが、近代美術の扉を開き、モネは、絵画に光をもたらした印象派を始めた。

ゴッホは浮世絵と融合し魂の絵を描いた。マチスは絵画を色から解放し、ピカソは、形を乗り越えた。当時のたくさんの方の作家の数多くの名画に出会えます。目を閉じると、なんだか古き良

きパリにいる気分になってしまう。この近くには、ピカソがよく通った店もあります。

ベルギー ブリュージュにて（絵28）

ブリュージュは、北のベニスです。運河沿いに、教会、昔の商館が建ち並びます。

中世にもどったような、落ち着いた風情のある街並みは、陽気なベニスとは一味違います。

ハンザ同盟で、言葉の異なるヨーロッパの市民がここで交易しました。

ここから、近代商業主義は発展し、自由を求める人々が、アメリカに渡りマンハッタンをつくった。近くには、ヨーロッパ統合のEC本部、ブルッセルがあります。

第2次世界大戦で、ナチスドイツがこの街を徹底的に破壊した。戦後市民が、昔の凶面をもとにレンガ1枚までそっくりに建て直した。モザイクづくりの美しい町です。当時のドイツの将校とピアニストの交流を描いた映画「戦場のピアニスト」の場所です。建物は、技術と情熱でもとに戻せても、心の傷は、永遠に残っている。こういう悲劇は、もう繰り返してはならない。

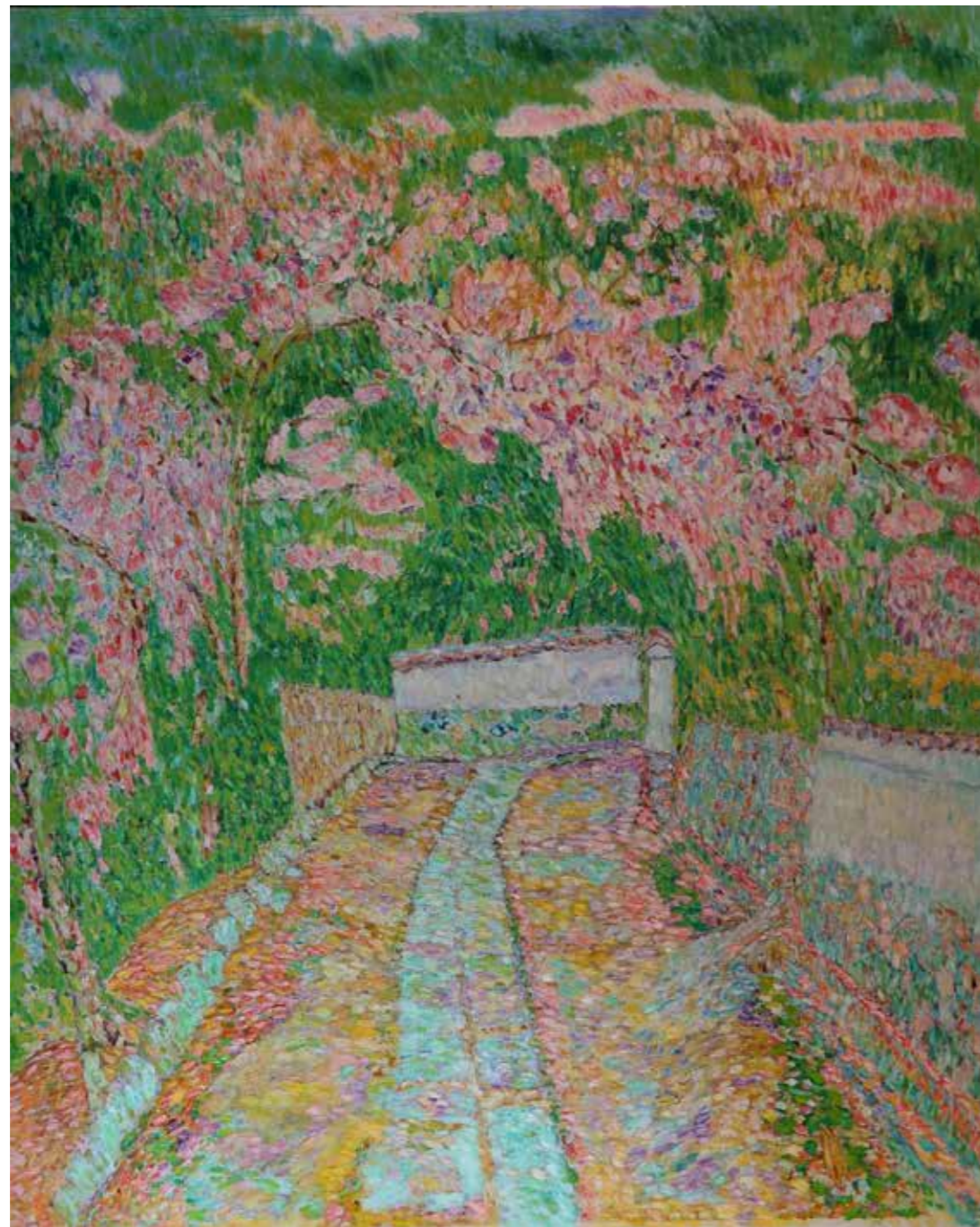
マンハッタンの摩天楼に上って

1970年代、海外出張中の合間を利用して、ニューヨークの摩天楼に上った。そこから眺める景観は、整然と建つ教会のように見える。神が創造したアートそのものではないかと驚愕しました。高層ビルの集団、ここから見える地上の人は蟻のように見える。人間には、このようなものを作る力があるのだ。そう考えると、かつて畏怖、救いを求めた神は、技術や金融にとって代わったように見える。それは、一瞬の幻想にすぎないのだが。ドフトエスキューは、「カラマーゾフの兄弟」の大審問官のところで、イワンにこう述べさせている。

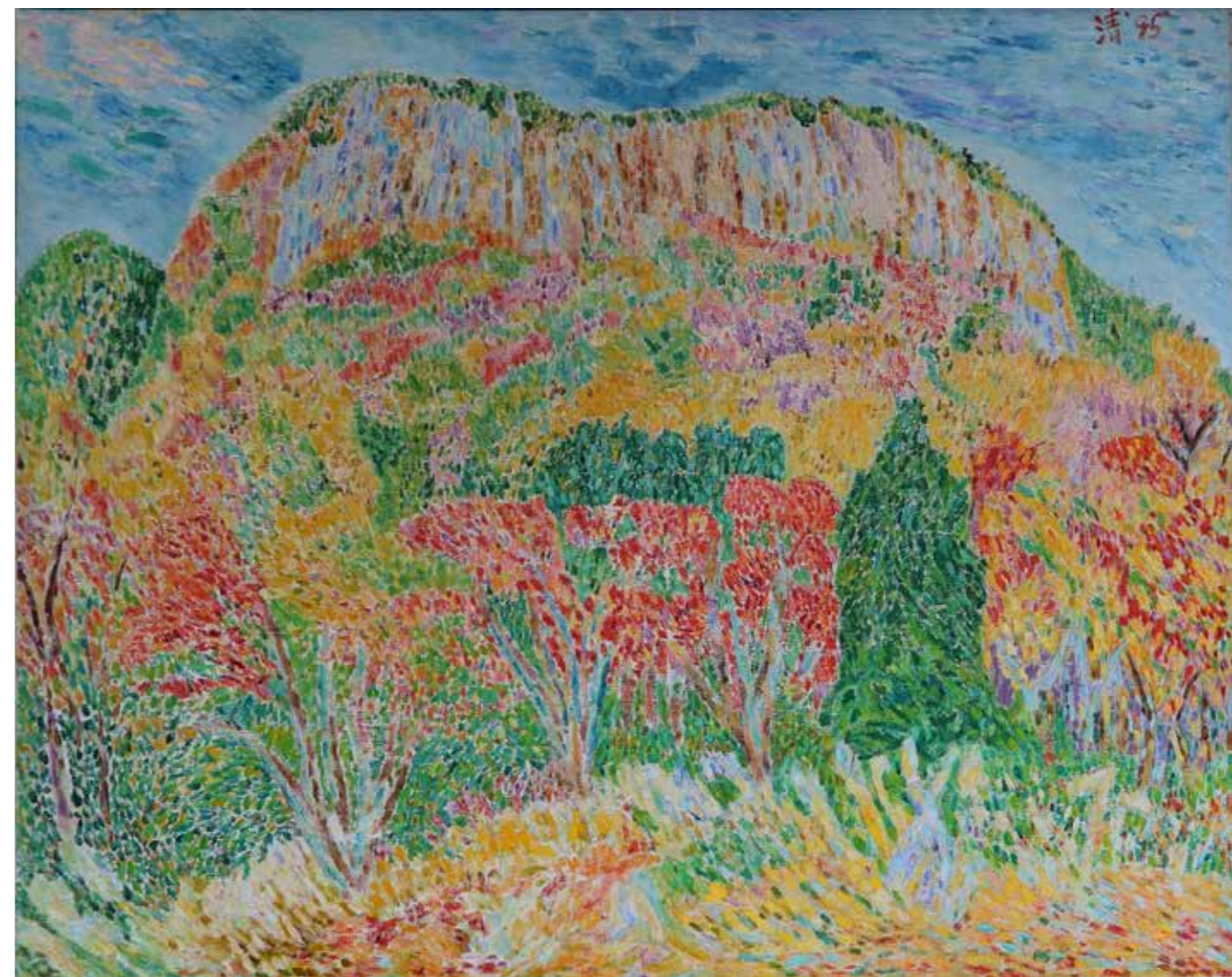
「たしかに神が人間を作った。しかし、その神を作ったのは人間の頭ではないか。」それから、9・11の同時多発テロが起きた。また、阪神淡路大地震。3・11の東北大地震。これからも災害はいつ起こるかわからない。テロの恐怖。我々は、廃棄処理に途方もない年月を要する負の遺産を、後世に残してしまった。自然から大変な教訓を得たではないか。いまでも人間の頭脳が生み出した核の脅威に怯えているではないか。

「アートの原点」は、描きたいそして伝えたいという「祈り」から始まったのです。救いと祈りは、人間にとって生きていくために欠かせない。この救いへの渴望は、今でも、ラスコーの壁画時代とやら変わっていない。

私の100枚の絵



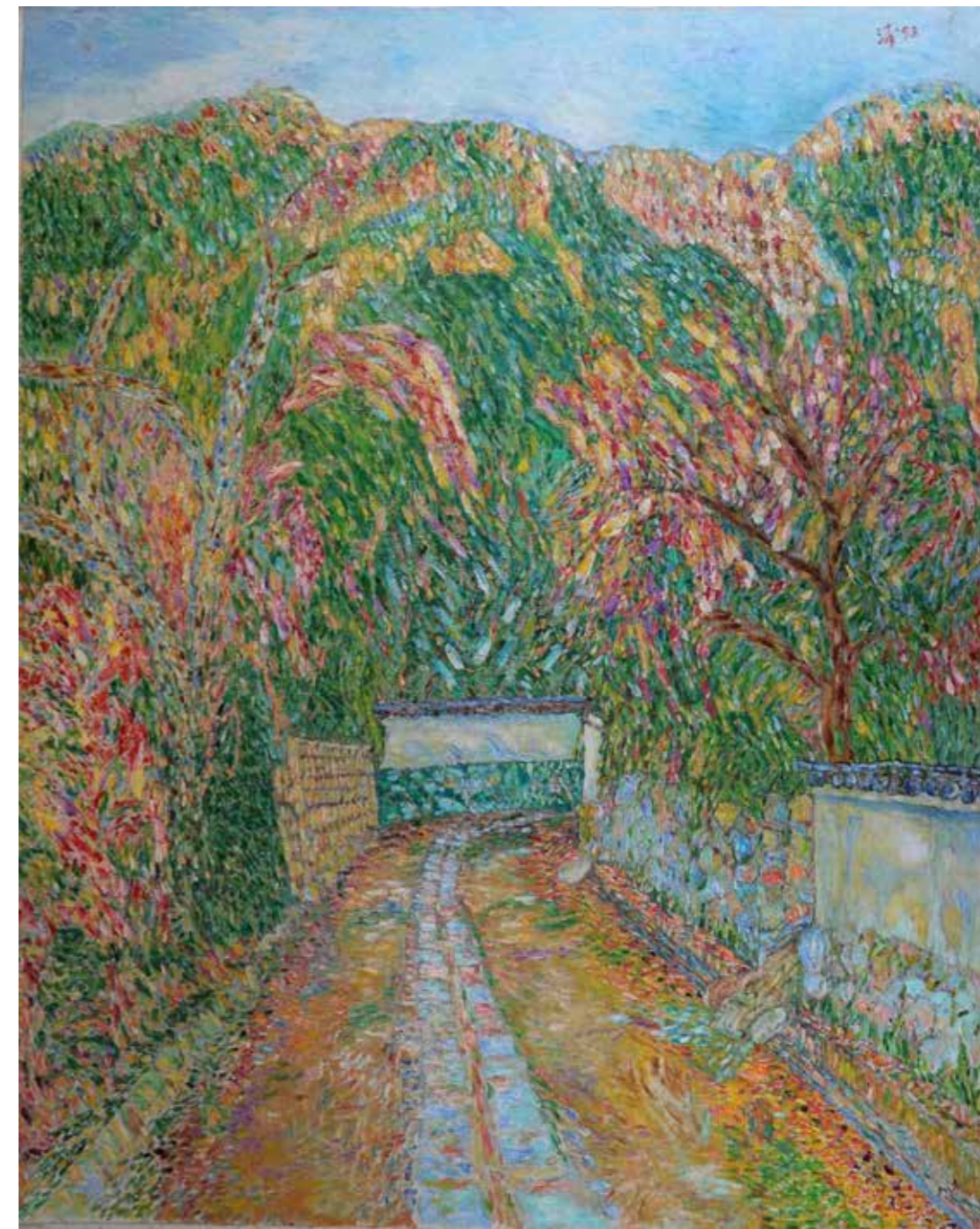
絵3 花の寺—春—
F 100 油彩 2002 年



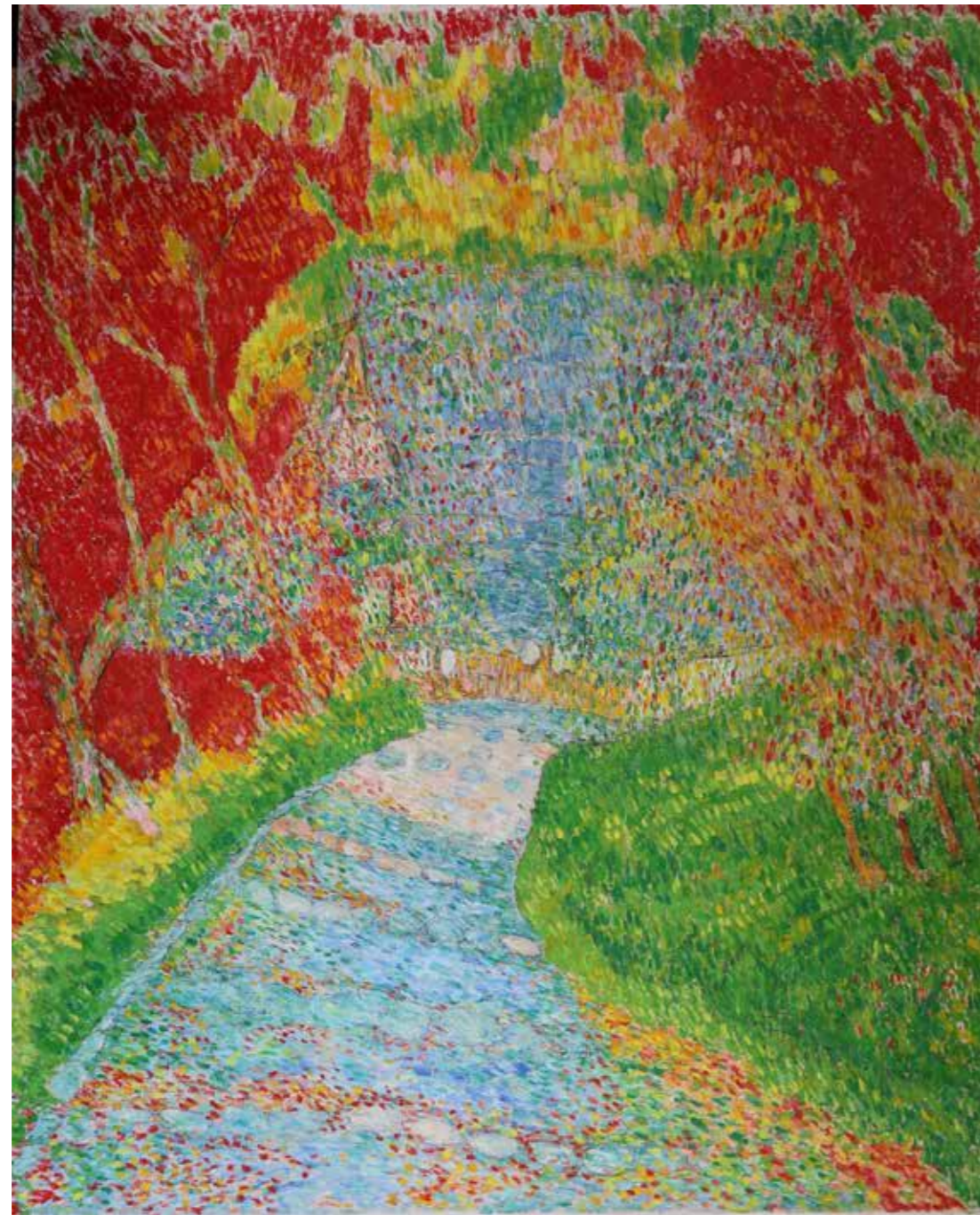
絵2 錦秋の屏風岩 F 100 油彩 1996 年



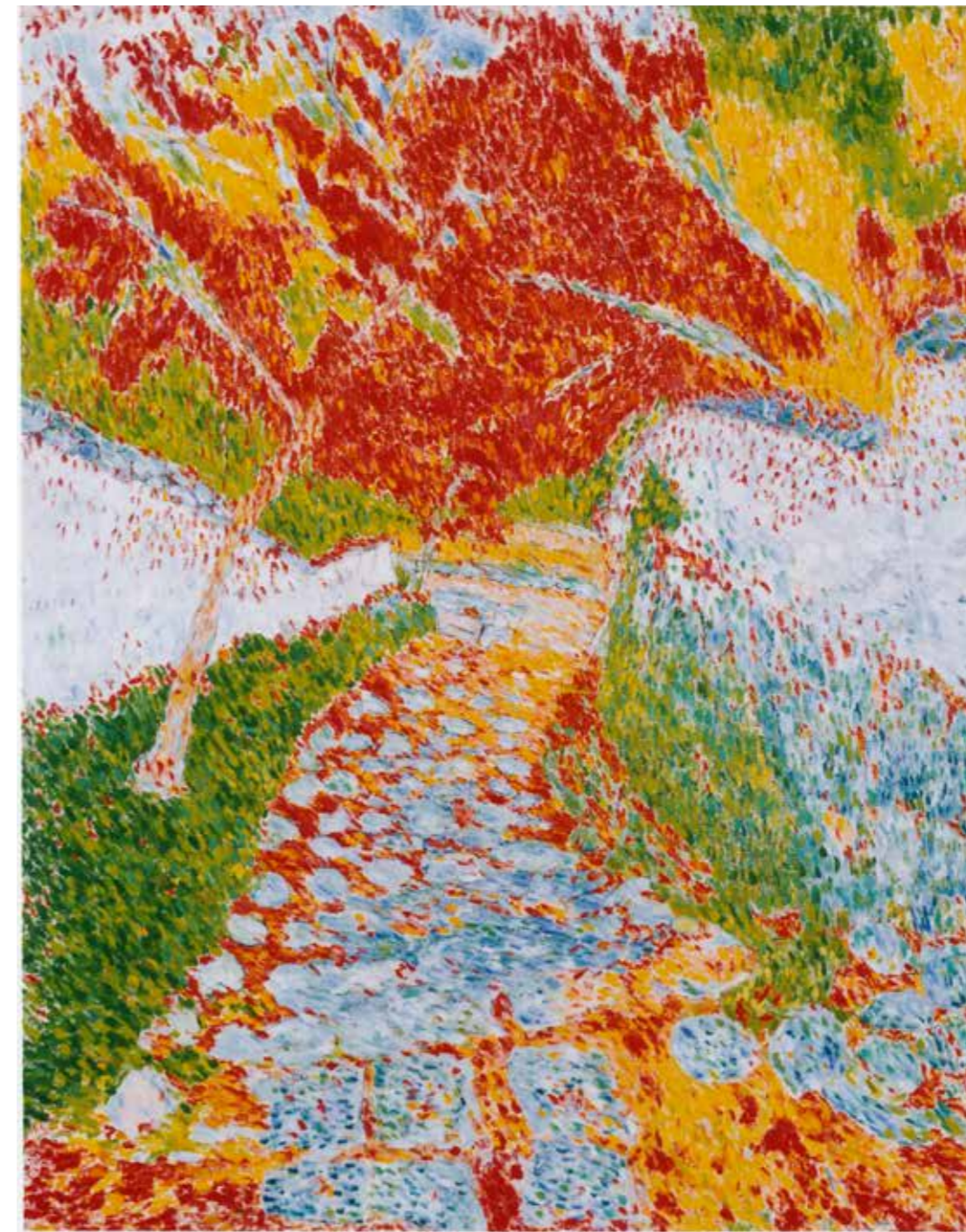
絵5 錦秋 勝持寺
F 100 油彩 2004 年



絵4 花の寺—秋—
F 100 油彩 1999 年



絵7 錦秋 吉峰寺
F 100 油彩 2004 年



絵6 錦秋 勝持寺
F100 油彩 2002 年



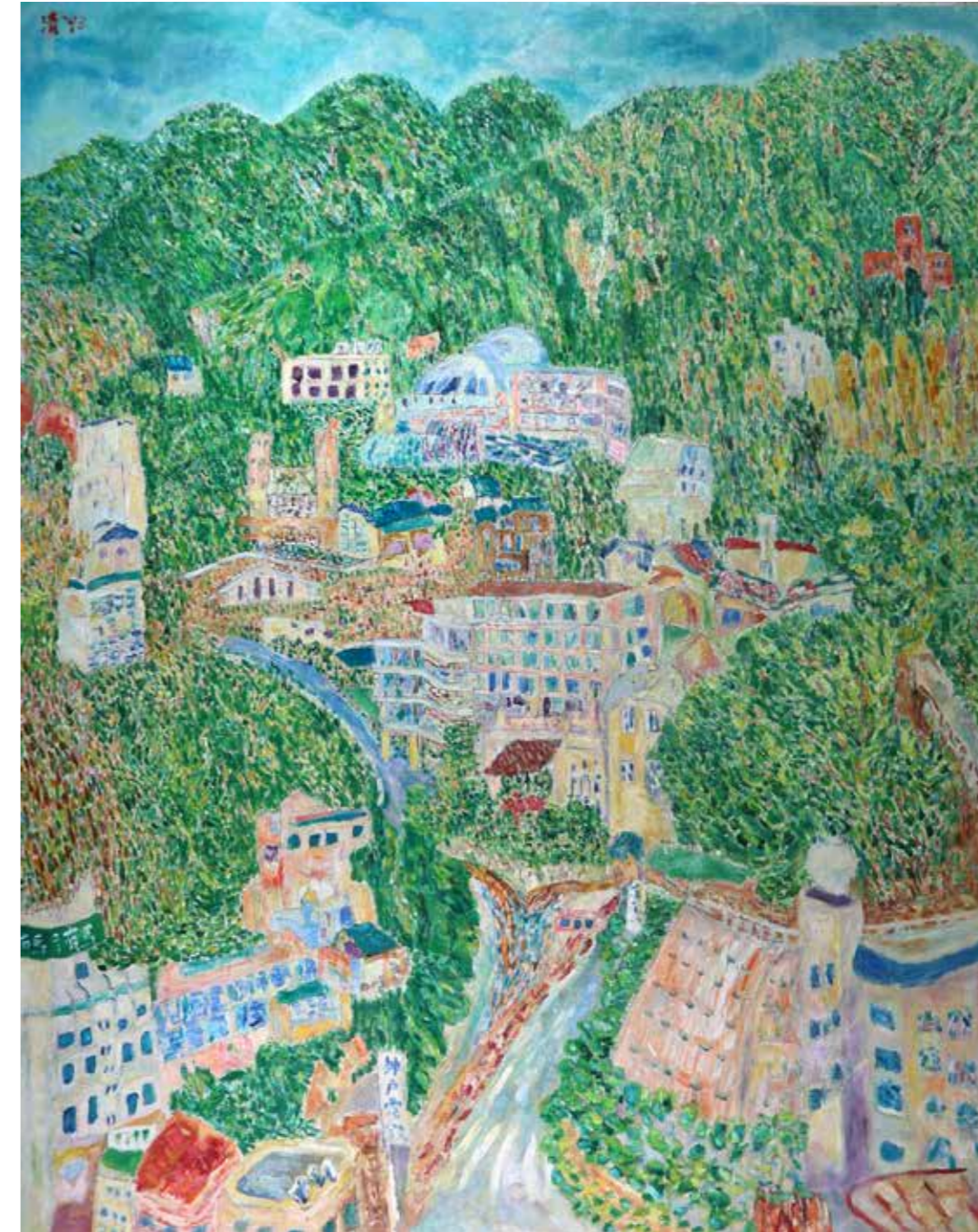
絵9 新緑の六甲アイランド
F100 油彩 1993年



絵8 ぼたんの回廊
F100 油彩 1994年



絵11 里の秋 大柳生
F100 油彩 1998年



絵10 新緑の有馬
F100 油彩 1994年



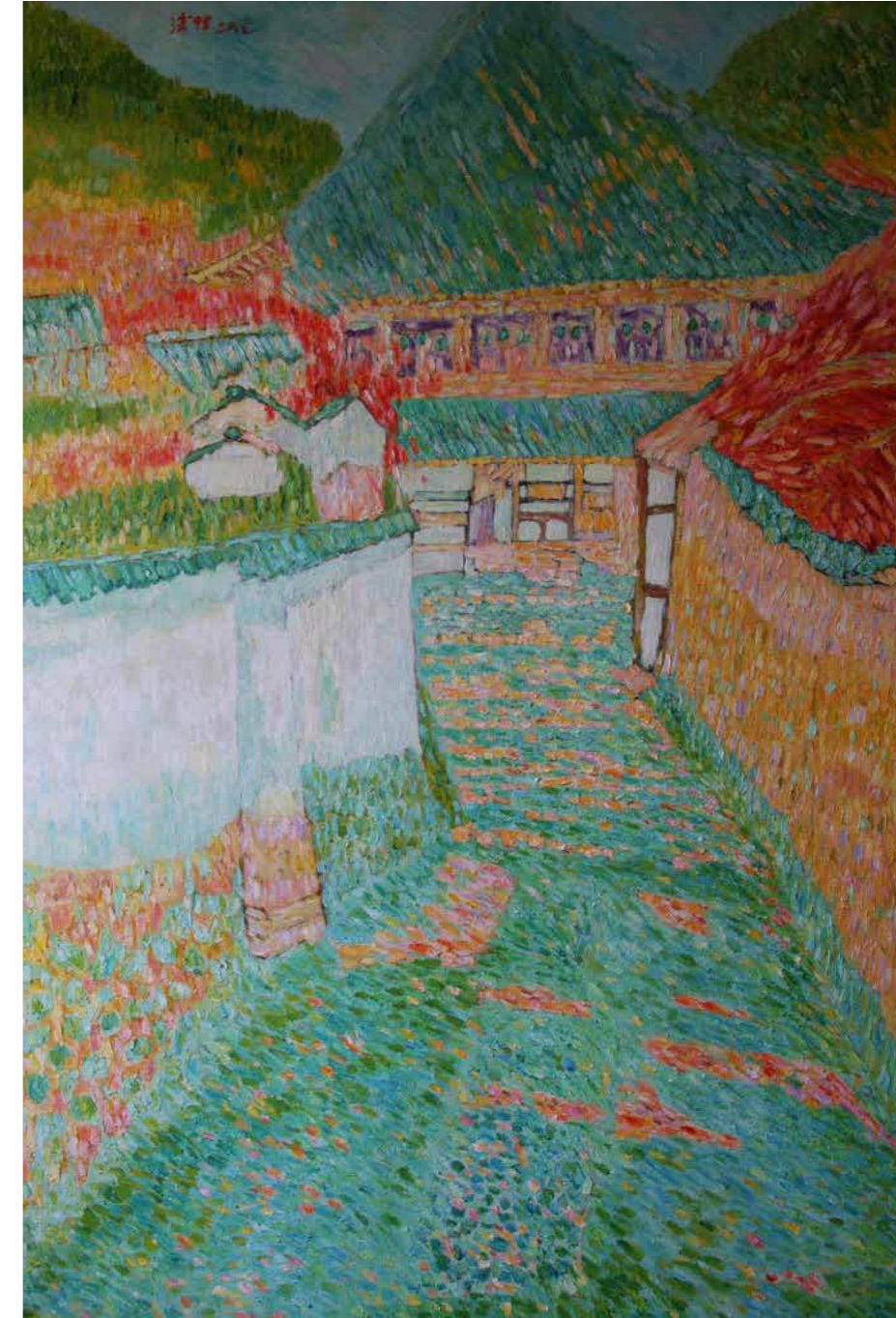
絵13 里の秋 柳生
F50号 油彩 1992年



絵12 里の秋 大柳生
F100 油彩 1999年



絵15 ろうそく奉納 F100
油彩 2004年



絵14 二月堂への道 F100
油彩 2003年



絵17 辻回し2 F100
油彩 2011年



絵16 辻回し1 F100
油彩 2010年



絵19 わっしょい. わっしょい2 天神祭
F50 油彩 2015年



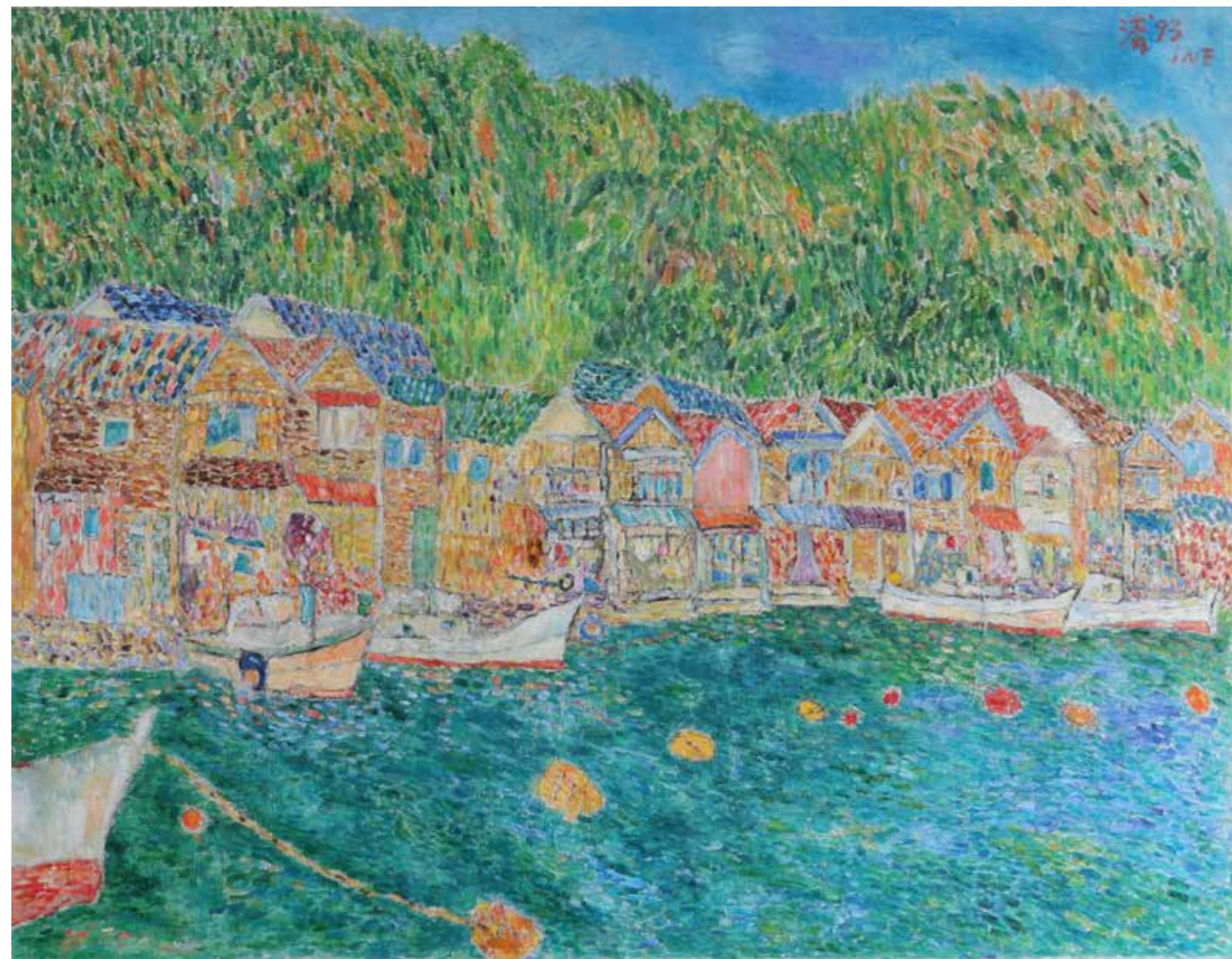
絵18 わっしょい. わっしょい1 天神祭
F100 油彩 2015年



絵21 太公望（大阪南港）
F 60 油彩1993年



絵20 ソーレー（だんじり祭り）
F 100 油彩 2014年



絵23 舟屋 (伊根)
F 50 油彩 1993年



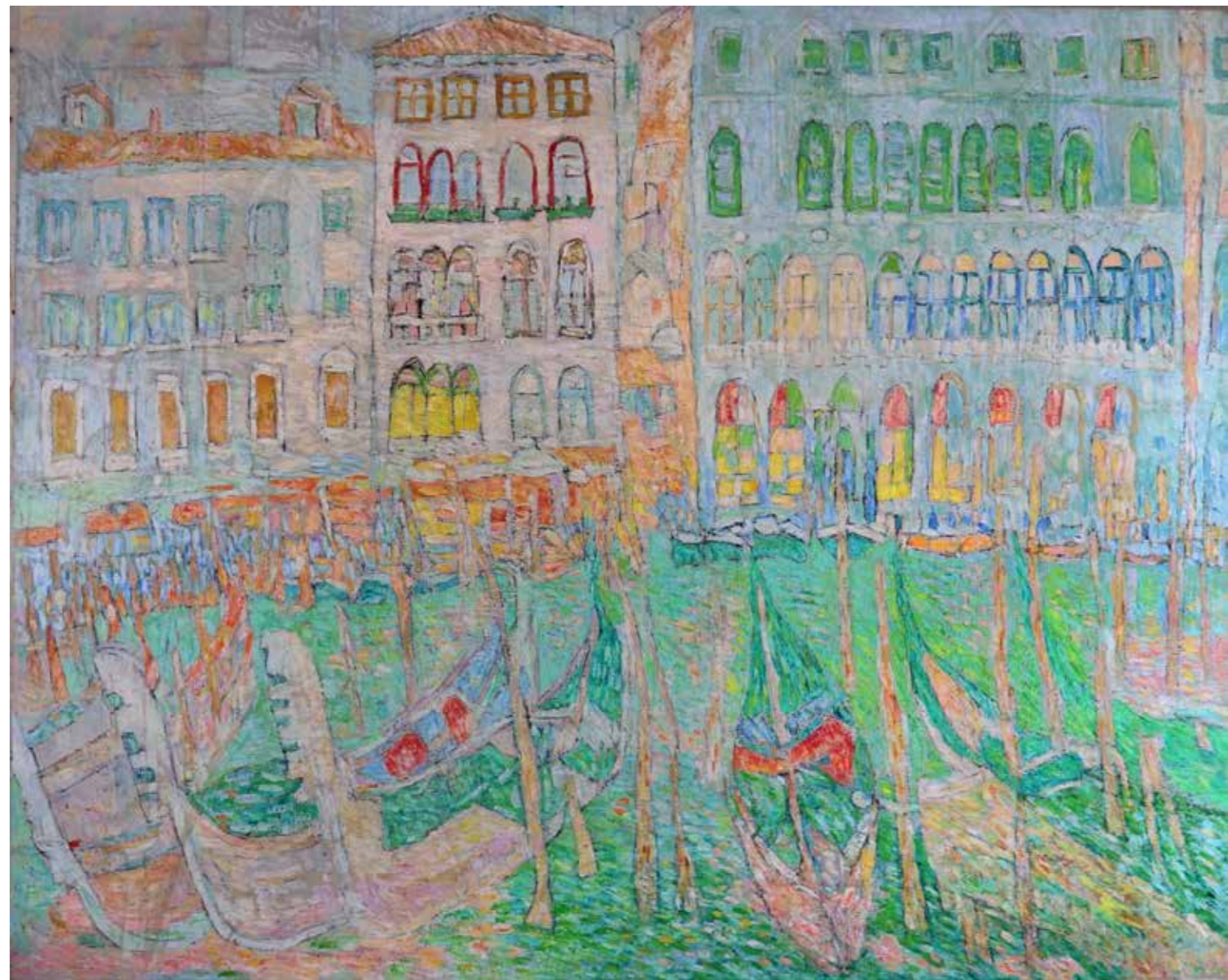
絵22 イカ釣り船 (伊根)
F 100 油彩 2012年



絵1 晩秋の中央公会堂
F 60 油彩 1993 年



絵24 惜春 (八幡背割り桜)
F 100 油彩 2016 年



絵26 ギンドラの詩 (ベニス)
F 100 油彩 2002年



絵25 春を待つ (妙高高原)
F 200 油彩 2010年



絵28 運河の詩 (ブリュージュ)
F 100 油彩 2013 年



絵27 私がカルメン (スペイン アルハンブラ)
F 100 油彩 1992 年



絵34 背割り桜
F10 油彩 2013年

桜のころ



絵33 大阪城梅林 F10 油彩 2014年

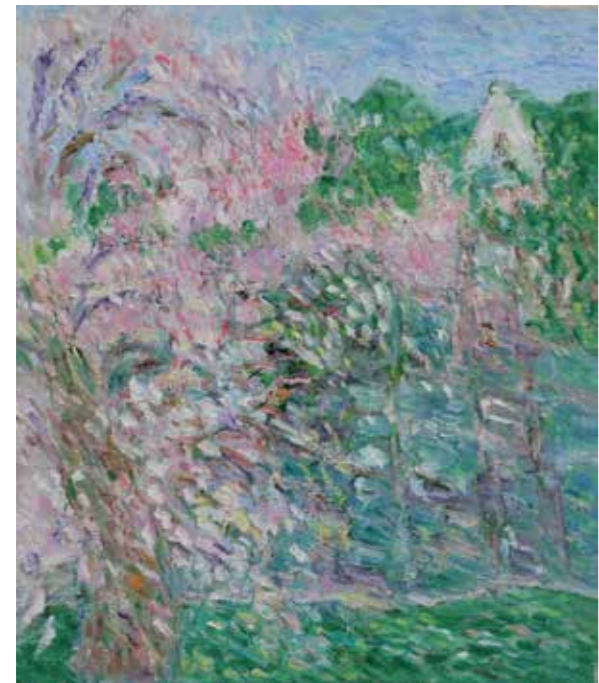


絵29 梅溪 (月ヶ瀬) F15 油彩 2005年



絵30 梅溪 (月ヶ瀬) F10 油彩 2004年

日本の美を求めて 春梅の頃



絵35 大阪城の桜 F10 油彩 2013年



絵36 勝持寺の桜 F10 油彩 2010年



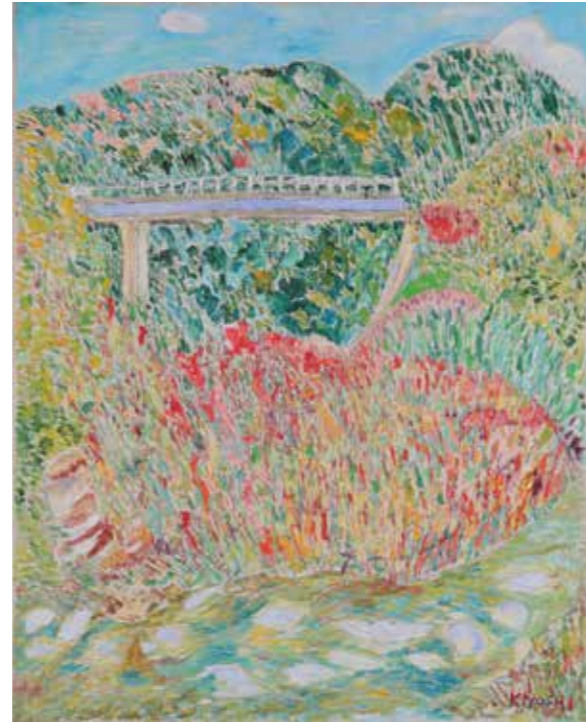
絵31 梅の匂い F8 油彩 2010年



絵32 大阪城梅林 F10 油彩 2015年



絵41 桂離宮
F 30 油彩 1995年



絵40 天ヶ瀬
F 30 油彩 1992年

錦秋



絵37 桜並木 (勝持寺)
F 10 油彩 2002年



絵39 伏見酒蔵 F10 油彩 2005年



絵42 吉峰寺 F 20 油彩 2005年



絵43 宇治川 F 10 油彩 2011年



絵38 哲学の小径
F 10 油彩 2003年



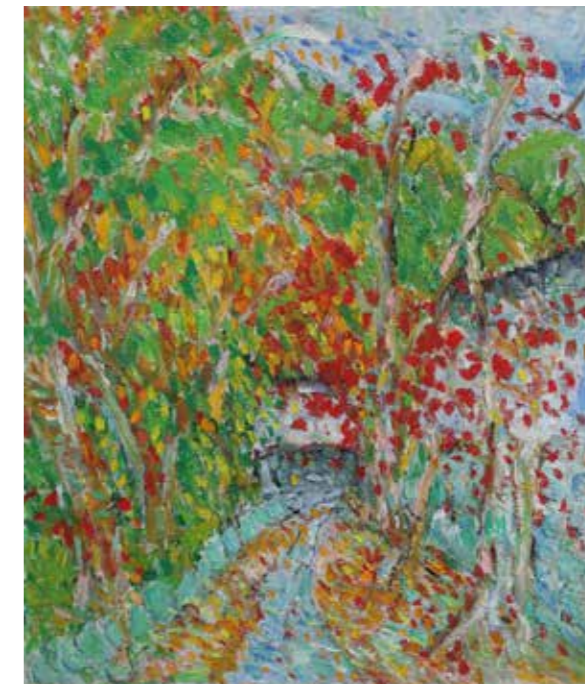
絵48 安楽寺 F 10 油彩 2010年



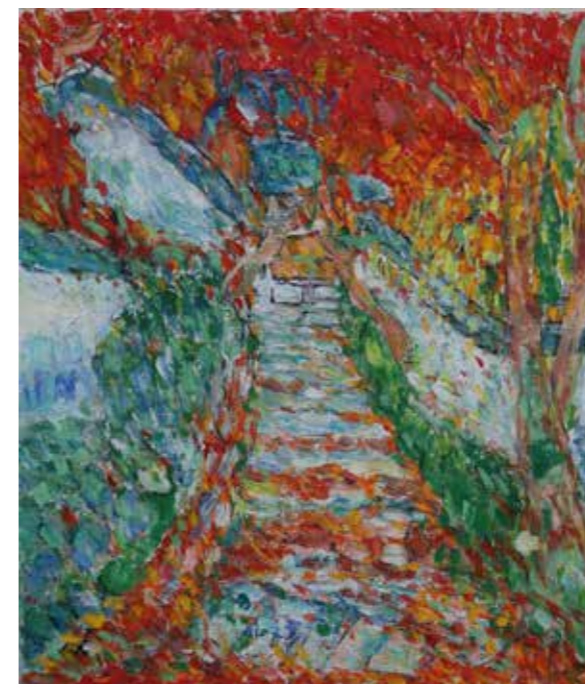
絵49 東福寺 F 10 油彩 2016年



絵44 勝持寺
F 10 油彩 2010年



絵45 勝持寺
F 10 油彩 2011年



絵46 勝持寺
F 10 油彩 2012年



絵47 勝持寺
F 10 油彩 2013年

祭



絵54 コンチキチン（祇園祭） F 10 油彩 2016年



絵55 お迎え太鼓（天神祭り） F 8 油彩 2016年



絵50 パラ（中の島公園） F 10 油彩 2016年



絵51 パラ（中の島公園） F 10 油彩 2015年



絵52 ぼたんの回廊（長谷寺） F 10 油彩 2014年



絵53 花菖蒲（山田池公園） F 10 油彩 2016年

花



絵61 だんじり祭り F 10 油彩 2015年



絵60 だんじり祭り
F10 油彩 2016年



絵56 わっしょい わっしょい (天神祭) F10 油彩 2016年



絵57 わっしょい わっしょい (天神祭) F10 油彩 2016年



絵63 だんじり祭り F 6 油彩 2016年



絵62 だんじり祭り
F 6 油彩 2015年



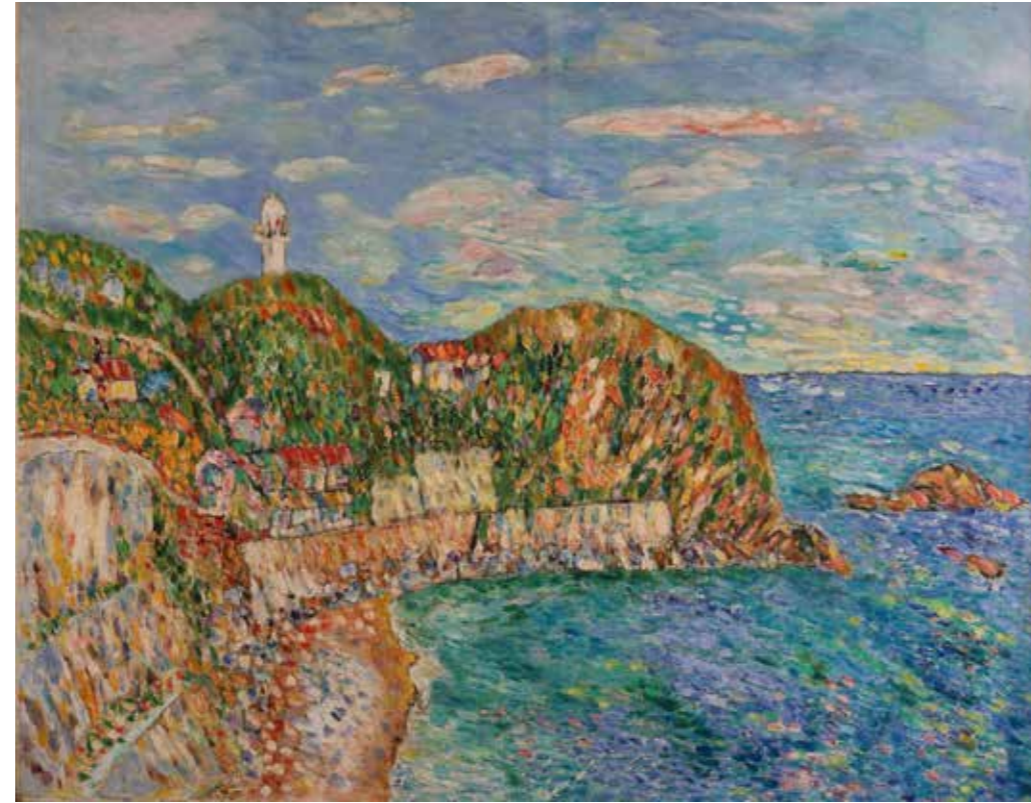
絵58 わっしょい わっしょい (天神祭) F10 油彩 2015年



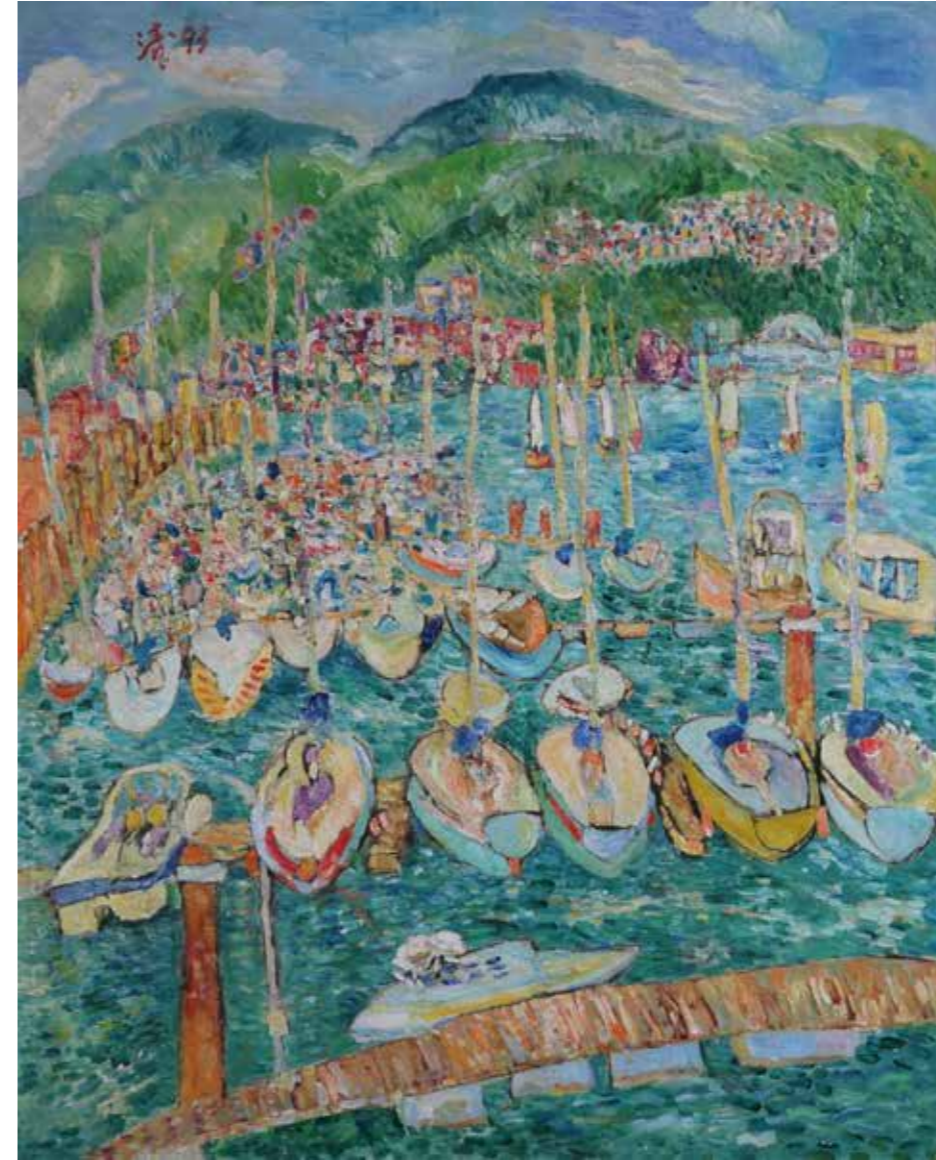
絵59 だんじり祭 F10 油彩 2015年



絵 67 尾道海景
F 10 油彩 2002 年



絵 66 海景 (大王崎) F 30 油彩 1993 年



絵 64 ヨットハーバー (芦屋) F 30 油彩 1994 年



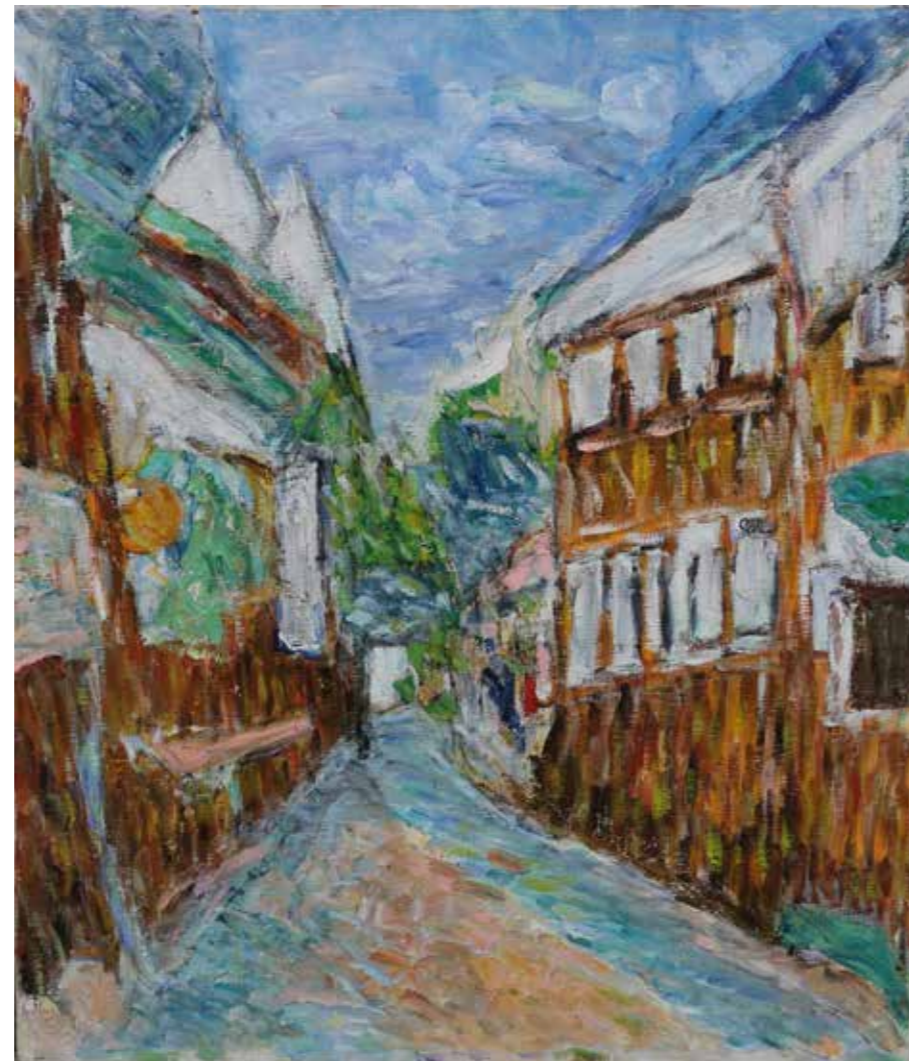
絵 65 太公望 (大阪港) F 15 油彩 1993 年



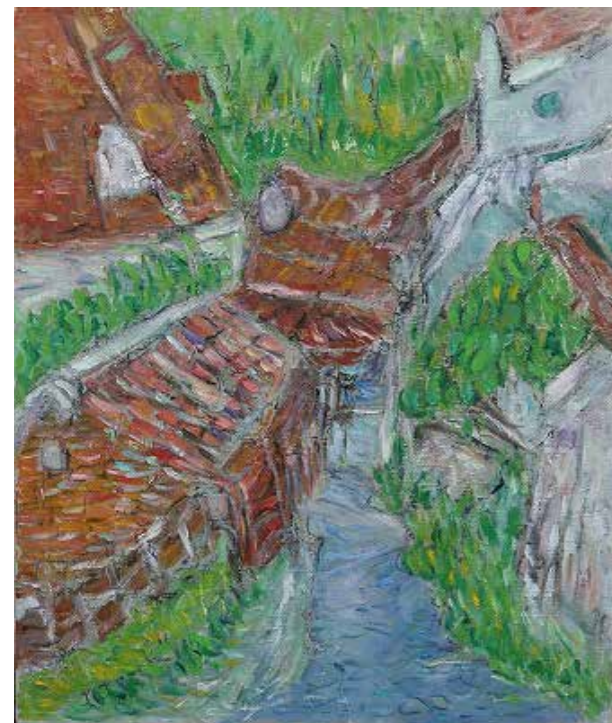
絵 68 尾道海景 F 10 油彩 2006 年



絵72 土塀の小径
F10 油彩 2010年



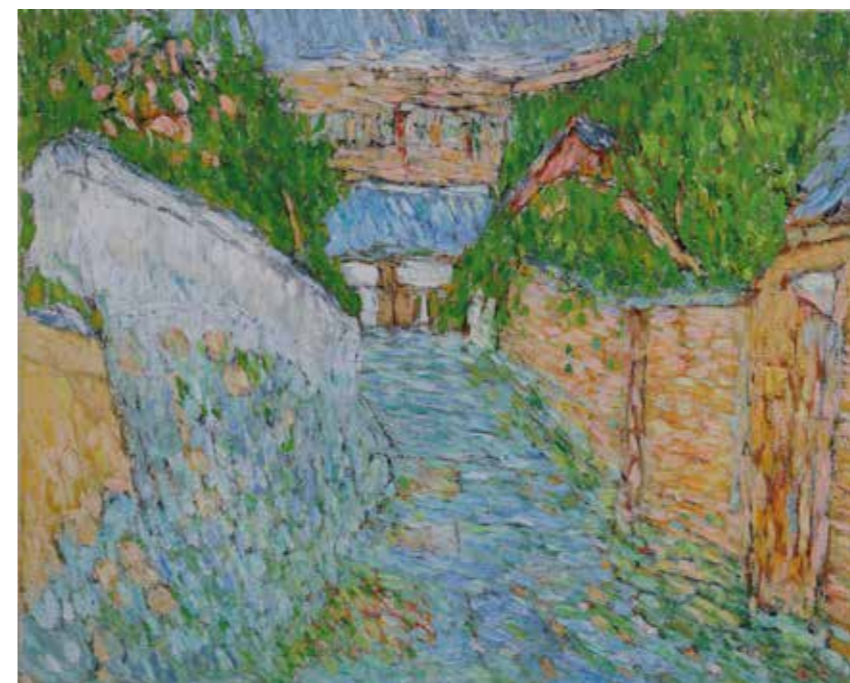
絵74 酒蔵 F10 油彩 2013年



絵73 美しい村 F8 油彩 2013年



絵70 二月堂への道
F15 油彩 2003年



絵71 二月堂への道
F15 油彩 2010年



絵69 二月堂への道 F20 油彩 1997年



絵77 バクシーシ
F 8 油彩 2003 年



絵78 皮工房
F8 油彩 2003 年



絵79 蛇つかい F 6 油彩 2003 年

見知らぬ世界を求めて
マラケシュ(モロッコ)



絵75 稲穂の小径 F 6 油彩 2015 年



絵76 神事 F 10 油彩 2015 年



絵84 親子（西域古城）F15 油彩 2002年



絵85 少女（九寨溝）F10 油彩 2002年

中国西域古城・九寨溝



絵80 絨毯の道 F10 油彩 2012年



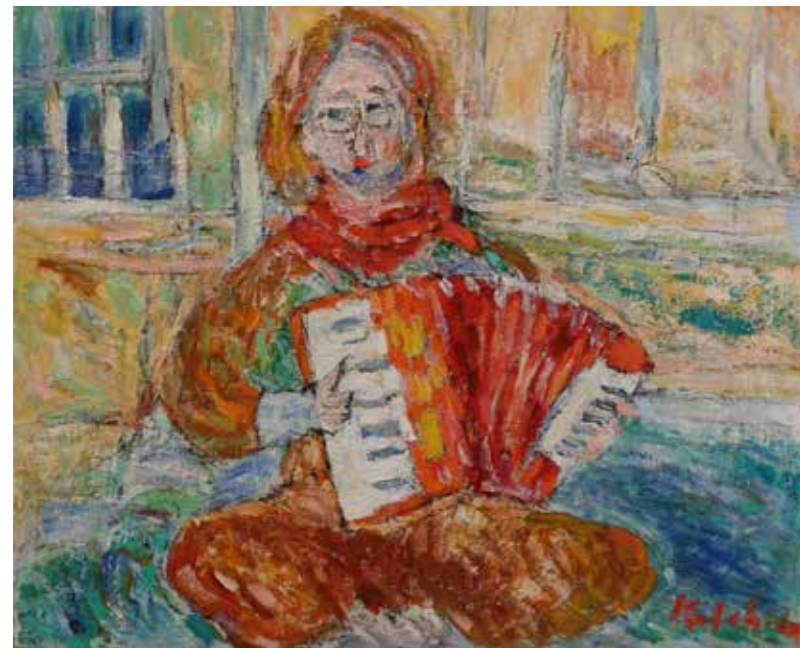
絵81 楽隊 F10 油彩 2012年



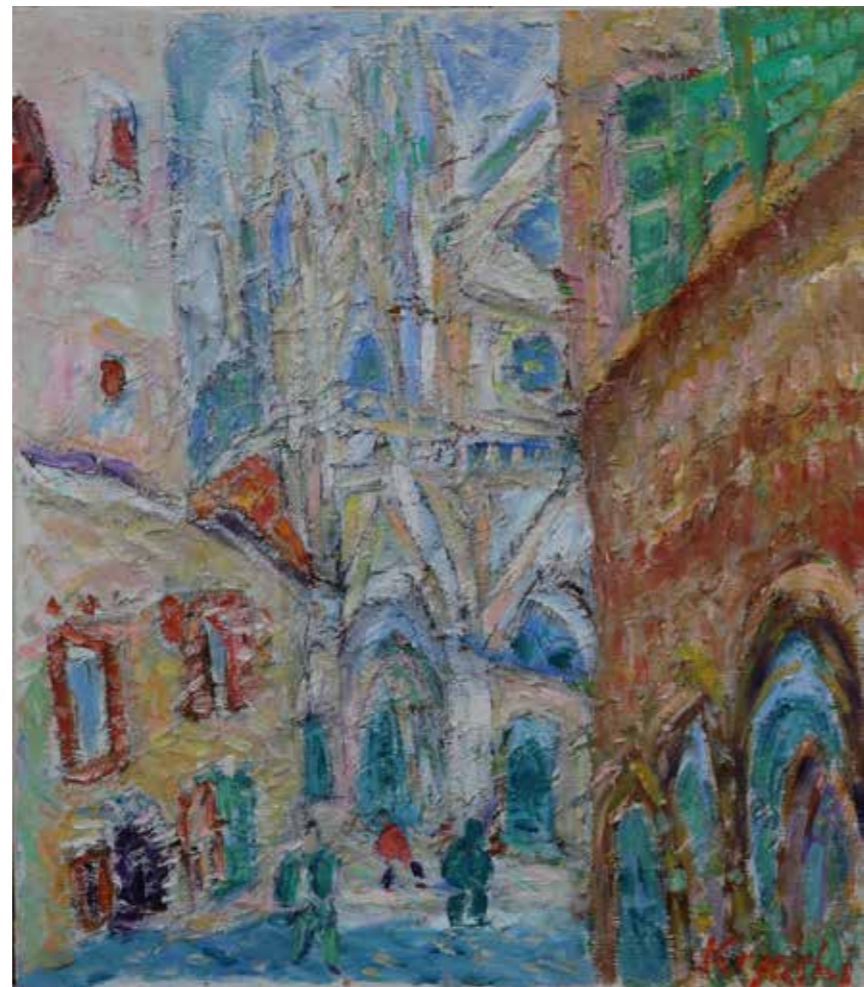
絵82 親子 F10 油彩 2012年



絵83 少年 F10 油彩 2012年



絵 89 アコーディオン弾き (フレンチェ)
F8 油彩 2002 年

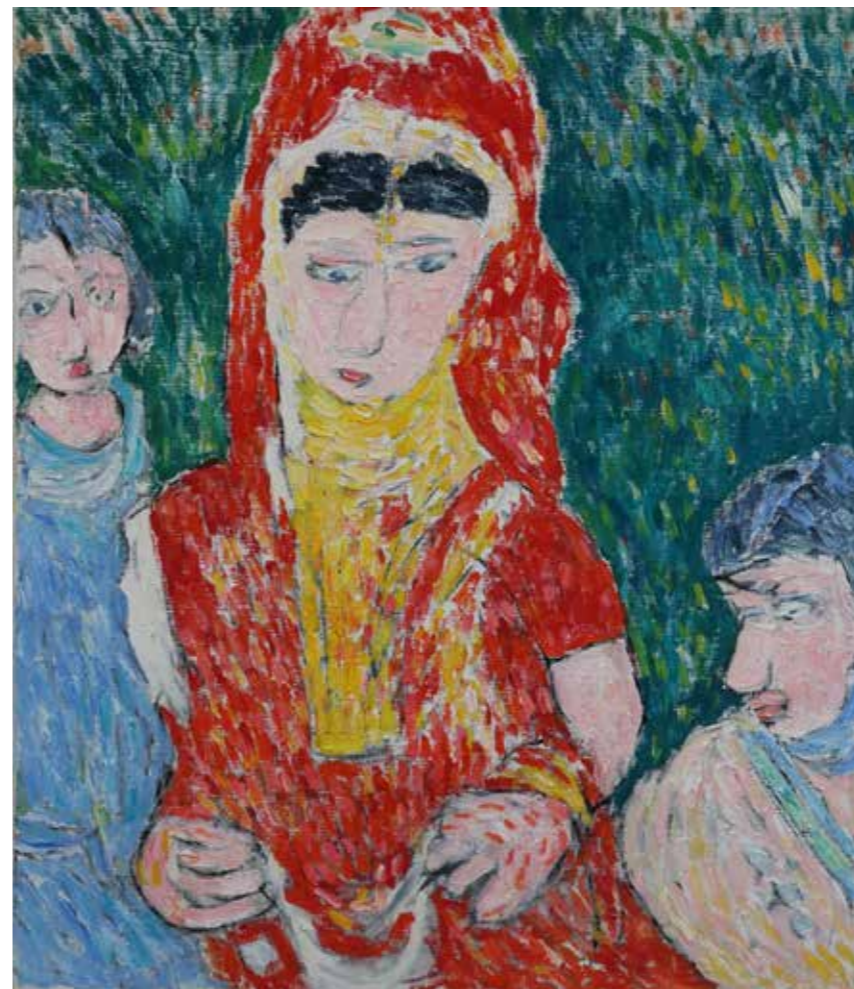


絵 90 教会 F 10 油彩 2005 年



絵88 ゴンドラの詩 (ベニス)
F 8 油彩 2002 年

イタリア



絵86 花嫁 F10 油彩 2003 年



絵87 婚礼 F10 油彩 2003 年

インド
ベラレス



絵94 赤い屋根 (城壁 クロアチア)
F10 油彩 2013年



絵96 中世の町 (チェコ) F10 油彩 2013年



絵95 城壁 (クロアチア)
F10 油彩 2013年



絵92 赤い屋根 (チェコ)
F8 油彩 2008年



絵91 モザイクの町 (ワルシャワ)
F10 油彩 2008年



絵93 少女 (チェコ) F10 油彩 2008年



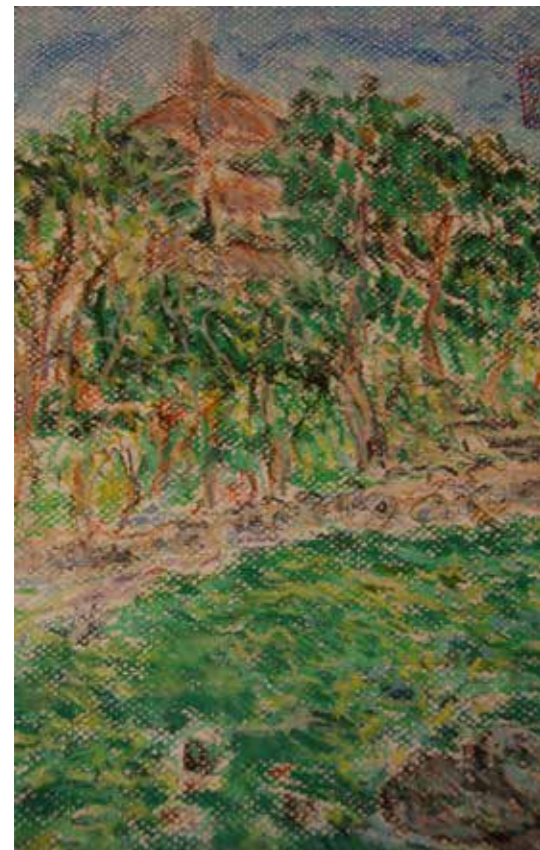
3 伏見酒蔵 パステル
2013年



1 わっしょい、わっしょい パステル 2014年



2 哲学の小径 パステル 2015年



4 猿沢池 パステル
2015年

私のスケッチ帖から



絵97 ローマが見える
F10 油彩 2012年



絵99 ヨットハーバー (ニース)
F10 油彩 2013年



絵98 カフェ (パリ) F10 油彩 1999年

作品一覧

絵番	タイトル		ページ
1	晩秋（中央公会堂）	1993年新制作協会展	表紙
2	錦秋の屏風岩	全関西展コンクール入選	20
3	花の寺-春-	2001年近代美術協会展	21
4	花の寺-秋-	2001年近代美術協会展	22
5	錦秋 勝持寺	2005年近代美術協会展	23
6	錦秋 勝持寺	2003年近代美術協会展	24
7	錦秋 吉峰寺	2004年近代美術協会展	25
8	ぼたんの回廊	御堂筋コンクール	26
9	新緑の六甲アイランド	印象神戸絵画展	27
10	新緑の有馬	有馬温泉展	28
11	里の秋 大柳生	2002年近代美術協会展	29
12	里の秋 大柳生		30
13	里の秋	第42回勤労者美術展第3席	31
14	二月堂への道	2003年近代美術協会展	32
15	ろうそく奉納	2004年近代美術協会展	33
16	辻回し1		34
17	辻回し2	2011年近代美術協会展	35
18	わっしょい、わっしょい1 天神祭	2015年近代美術協会展	36
19	わっしょい、わっしょい2 天神祭		37
20	ソーレー（だんじり祭）	2014年近代美術協会展	38
21	太公望（大阪南港）	1993年行動美術協会展	39
22	イカ釣り船（伊根）	2012年近代美術協会展	40
23	舟屋（伊根）	第42回勤労者美術展第3席	41
24	惜春（八幡背割り桜）	2016年近代美術協会展	42
25	春を待つ（妙高高原）	2010年近代美術協会展	44
26	ゴンドラの詩（ベニス）	2002年近代美術協会展	45
27	私がカルメン（スペイン）	1992年新制作展	46
28	運河の詩（ブリュージュ）	2013年近代美術協会展	47
100	里の秋	1992年勤労者美術展第1席	裏表紙

絵番	タイトル	ページ
29	梅溪1（月ヶ瀬梅林）	48
30	梅溪2（月ヶ瀬梅林）	48
31	梅の匂い（大阪城）	48
32	大阪城梅林	48
33	大阪城梅林	49
34	背割り桜（八幡背割り桜）	49
35	大阪城の桜	49
36	勝持寺の桜	49
37	桜並木（勝持寺）	50
38	哲学の小径	50
39	伏見酒蔵	50
40	天ヶ瀬	51
41	桂離宮	51
42	吉峰寺	51
43	宇治川	51
44	勝持寺	52
45	勝持寺	52
46	勝持寺	52
47	勝持寺	52
48	安楽寺	53
49	東福寺	53
50	バラ（中の島公園）	54
51	バラ（中の島公園）	54
52	ぼたんの回廊（長谷寺）	54
53	花菖蒲（山田池公園）	54
54	コンチキチン（祇園祭）	55
55	お迎え太鼓（天神祭）	55
56	わっしょい わっしょい1（天神祭）	56
57	わっしょい わっしょい2（天神祭）	56
58	わっしょい わっしょい3（天神祭）	56
59	だんじり祭り1	56
60	だんじり祭り2	57
61	だんじり祭り3	57
62	だんじり祭り4	57
63	だんじり祭り5	57
64	ヨットハーバー（芦屋）	58

スケッチ

絵番	タイトル	ページ
65	太公望（大阪港）	58
66	海景（大王崎）	59
67	尾道海景1	59
68	尾道海景2	59
69	二月堂への道1	60
70	二月堂への道2	60
71	二月堂への道3	60
72	土堀の小径（新薬師寺）	61
73	美しい村（フランス）	61
74	酒蔵（伏見）	61
75	稲穂の小径（枚方市）	62
76	神事（伏見稲荷神社）	62
77	バクシーシ（マラケシ）	63
78	皮工房（マラケシ）	63
79	蛇つかい（マラケシ）	63
80	絨毯の道（マラケシ）	64
81	楽隊（マラケシ）	64
82	親子（マラケシ）	64
83	少年（マラケシ）	64
84	親子（西域古城）	65
85	少女（九さい溝）	65
86	花嫁（インド）	66
87	婚礼（インド）	66
88	ゴンドラの詩（ベニス）	67
89	アコーディオン弾き（フレンチェ）	67
90	教会（イタリアの古い城壁都市）	67
91	モザイクの町（ワルシャワ）	68
92	赤い屋根（チェコ）	68
93	少女（チェコ）	68
94	赤い屋根（城壁 クロアチア）	69
95	城壁（クロアチア）	69
96	中世の町（チェコ）	69
97	ローマが見える（ローマ）	70
98	カフェ（パリ）	70
99	ヨットハーバー（ニース）	70



7 教会（イタリア）パステル 2005年



6 城壁（クロアチア）
パステル 2013年



10 ビールバイク（アムステルダム）パステル 2012年



9 小径（カプリ島）パステル 2005年



5 桜吹雪（八幡背割り桜）パステル 2016年



8 石畳の町（ブルッセル近郊）
パステル 2012年

私の画跡の一区切りとして、100枚の絵を選んだ。

様々な想い出が蘇ってきます。

東京、上野の美術館に二十年間近く出品し続け、長くこの道を歩んでこられたのは、なぜなのだろうか。

会社生活の忙しい時間を縫って、多くの時間と制作費用を費やしてまで。

それは、絵を描くことが、楽しいからに尽きる。

「私と絵画との出会い」は、小学校の頃である。大阪の小学校から選ばれて、天王寺の大阪市立美術館に展示されたことは、なんの取り柄のなかった自分にとって、うれしくそして、懐かしい思い出である。

仕事で東京出張のとき、時間が取れたので上野の美術館で「ゴッホ展」を見た。このとき「自分もこんな絵が描けたらいいな。」と思った。

高校時代の美術の時間に初めて出会った油彩道具を引っ張り出して、枚方市の公民館の油彩サークルに参加し、仲間と自由に写生をしたころの楽しい思い出。

その翌年の秋、交野のくろんど池の辺りをドライブしていると、あのゴッホの作品と同じ構図の場所を発見した。早速、私は50号のキャンバスを車に積んで、3週間続けて土曜、日曜の朝から夕刻まで描いたのが、*里の秋*（最後の絵100）である。この作品は、勤労者美術展第一席に選ばれた。

この頃から、時間があれば、日本の美や海外での感動の印象を100号のキャンバスに描くようになった。

私の絵は、写生主義である。車の屋根に、100号のキャンバスを積み現地で描く。現場からしか、その場の空気をつかめないからである。

画家には、二つのものが必要である。それは、眼と頭脳であり、互いに助け合わなければならない。対象を素直にみる眼。頭脳は、本質を把握し表現手法を習得する力である。

仕事が技術系なので、なぜ、なぜと追及することに慣れている。

ゴッホやセザンヌそしてモネやマチスの作品は、機会のある限り見るように努めた。ゴッホの手紙、セザンヌと弟子のガスケとの対話などの美術論を熟読した。

現場で描いた100号の大作を、毎年、公募団体に出品してきた。宇津木欣二氏の勧めもあり、2000年から京都の祇園で毎年個展を開かせていただいている。

今年で二十三回目になる。個展を開いた初期のころ、来客者から頂いた

手紙には「寒い日、あなたの暖かい作品をみて、生きていく勇気が出ました。」

と書かれていた。このときは、私の作品が見る人に伝わっているのだと知り、絵を描いていてよかったと感じるとともに、制作に励む気持ちを新たにしたい。

自分が対象から得た深い感動をじつと見つめること。そして描くこと。

できた絵をじっくり眺めること。「絵が、何を訴えてくるか。風景なら、

その画に入っていく気になるか。」と感じるまで描くようにしてきた。

2007年、定年を機に、並河 博氏の勧めもあり、デジタルカメラを始めた。

カメラの場合、魅力に富む自然界の彩りの変化を求めて、その一瞬を捉えなければならぬ。

しかし、自然現象は気紛れなので、必ずしも望むようには変化してくれるとは限らない。

シャッターチャンスは、望むような色彩になるまで根気よく待って、

その一瞬に賭けなければならぬ。

絵もカメラも対象との出会いは、まさに一期一会である。

画家は絵筆と絵の具でキャンバスに、カメラマンは一瞬のシャッターチャンスで捉える。

2011年から、長行司 達氏の「書」とのコラボレーションを始めた。

「書」も、作者の息遣いが伝わってきてこそ、見る人に共感を与えるものだろう。

これからも、自然の恵みやまだ見知らぬ世界と出会いの感動を楽しむに、初心を忘れず歩んでいきたい。

巻頭の文章は、今宮高校の大先輩の西井義晃画伯に、表題の書「描くこと、伝えること」は、長行司 達氏に依頼しました。

毎回、個展の開催にご協力いただいている京都 西利ぎやらしい様、並河 博氏、阿部 忠氏、佐藤和栄氏 この作品集出版にあたり、撮影、編集、校正にお世話になった伊藤厚示氏、妻 典子ほか関係する皆様に深く感謝の意を表します。

この画集を亡き両親の仏前に捧げます。

2017年 1月 香里園 自宅アトリエにて



聖マリア教会



あすか

道

佇む 風の中

ちいさな あかりが

照らしてる

遠く 聞こえる

君の声

どこまでもつづく

この道を

いちだ のりこ 詩・画

My 100 Paintings, Kiyoshi Ichida – Mind and Works

Nature and climate create a beautiful and amazing appearance from the familiar scenery every season at an unexpected time in Japan.

Painting is to become one with the air that was living in the atmosphere.

It is really great discovery with a fresh surprise encountering with the unknown world.

I have a way which is given myself only.

It may sometimes be wide. Sometimes it may be narrow. If there may be a climb or may be also a downhill there.

Sometimes I am at a loss of thought.

But if my mind is set with clear confidence and walk with hope, I will always be able to open the road.

The deep delight and sincere satisfaction of painting is born from there.

Believing this, I chose 100s from my paintings solely painted so far.

100 paintings are definitely my children.

市田 清 私の100枚の絵
… あらたな出発 …
1992～2016

発行日 2017年2月15日
編集・発行 市田 清
メール ichida.kiyoshi@ares.eonet.ne.jp

印刷・製本 株式会社 大盛堂書房
〒657-0805
兵庫県神戸市灘区青谷町4-4-13
TEL 078-861-3436
FAX 078-861-3437

本書の一部を無断にて転載・複製することを禁じます。



ミューラー美術館でゴッホ作品と共に

著書

「技術と絵心で育まれた私の軌跡」

現在

近代美術協会 会員
京都デジタルフォト研究会
枚方市生涯学習推進審議会委員

京都 祇園 ぎやらり西利

行動美術協会、新制作協会、近代美術協会に出品
個展開催（1999～2016年まで毎年開催）

全関西美術展（1993年～）
公募展に出品（1993～現在）

勤労者美術展（労美展）第1席、日曜画家賞

1982年頃から絵画制作に取り組み
2007年 パナソニックを定年退職。

この傍ら絵画制作に取り組み。

1970年 松下電器産業株式会社（現パナソニック）に入社。

1970年 姫路工業大学 電子工学科卒業

1948年 大阪市に生まれる。

著者 略歴